

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫成美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 荻ノビル 5.6F

03-3359-7611 (Tel.) 03-3355-1462 (fax)

<http://www.genken.ac>

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載

許可なく作品の使用はしないでください。



Autume 2021 2号 2021.11.9 発行



千葉駅から徒歩5分、遊興街の栄町は西部劇のセットのようです。金瀬胖 2021年2月「コロナ下を歩く」

この時代を記録せよ、と言いますが同時代というのはいつも情報過剰であり、総括的な意味性のある表現、視点はなかなか定まらないものです。日頃の写真の眼というのが大切で、写真の眼は漫然として見ている目とは違うわけです。つまり、写真の眼を日頃から開いている、そのことので「いまこのとき」を見る視力が作られていくわけです。観光とか事件やイベントなどあらかじめの関心があつてのことではなく、長いトンネル、なにもない空白、愚かさや惰性、日常の渦のなかで、まずはこの私のいる光景への好奇心を持つことはこの時代の記録者の始まりなのだと思います。記録は確定した客観記録のように見えますが、思考し、迷い、諦め、愛し、怒り、決断する私がいる。〈私〉を通さないような記録はないわけです。写真はカオスも空白も激動も静もフレームに納めます。フレームすることなしに写真はありません。よくわからないカオス状態をフレームするとき独特の何か生まれます。その何かを読み解くのを「写真を読む」といいます。読んで名付けます。時代なき時代、などという哲学者？もいますが、そのひとは日々記録されてる写真、例えば現研のこの夏の記録、それを記録として見ていない、見ても感じ取ることが出来ないのでしょうか。

この夏はコロナが激しく感染拡大し、皆さんは大変な状況下で写真を撮り歩いた。その記録として今年のコンテストは、すこし時間を経て振り返ると、何が写されていたかが一層よく見えるかもしれません。そして深い共感を得た写真は現代の記録として残されていくわけです。

引き続き PHOTO SPACE に注目し、投稿してください。 教務主任 金瀬胖

CONTENS

わたしの夏コンテスト入賞作品

1-12

當摩勇雄 (モノクロ暗室専科) 13

清水和雄 (入江・金井ゼミ) 14

館山哲 (土曜ゼミ) 15

本條武志 (尾辻ゼミ) 16

長谷川啓一 (尾辻ゼミ) 17

飯倉豊啓 (飯塚ゼミ) 18

宮本壽男 (日曜撮影専科) 19

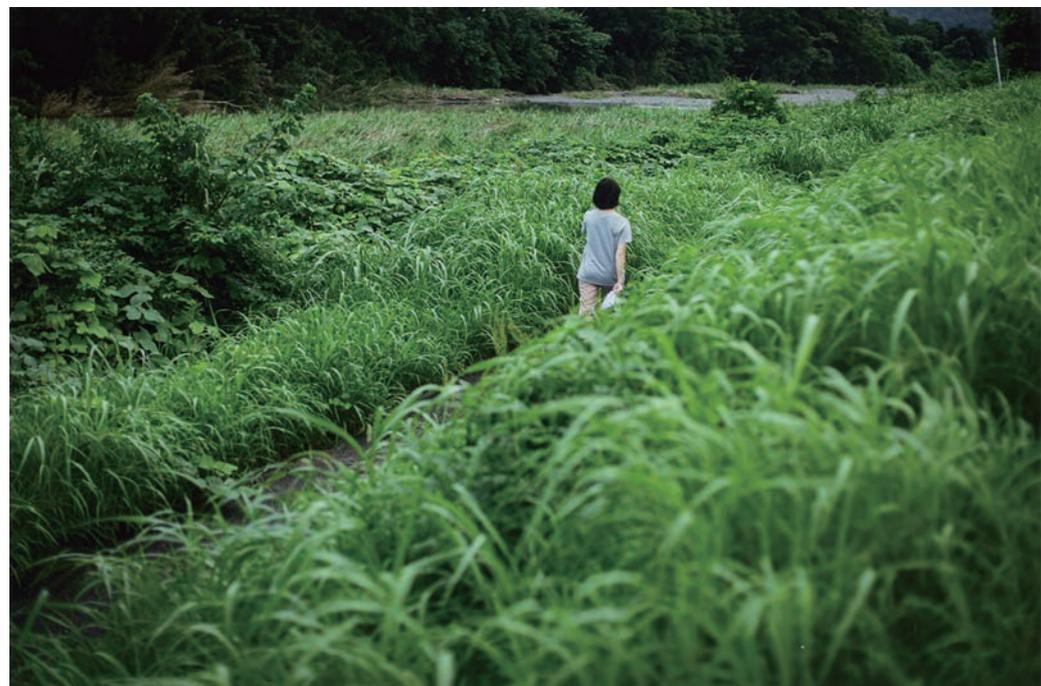
金井紀光 (講師) 20

尾辻弥寿雄 (講師) 21

金瀬胖 (講師) 22



特選 二階良子（総合科）「2021年引きこもりの夏」



準特選 鬼塚紀子（飯塚ゼミ）「コロナの夏 # 緑の勢い」



準特選 木崎昭（金瀬ゼミ）「夏日一鎌倉一」



入選 稲垣直子（総合科）「トロピカルアイ」



入選 赤塚ほしよ（飯塚ゼミ）「オリンピック周縁」



入選
江田悟志 (モノクロフィルワークショップ)
「静寂音頭」



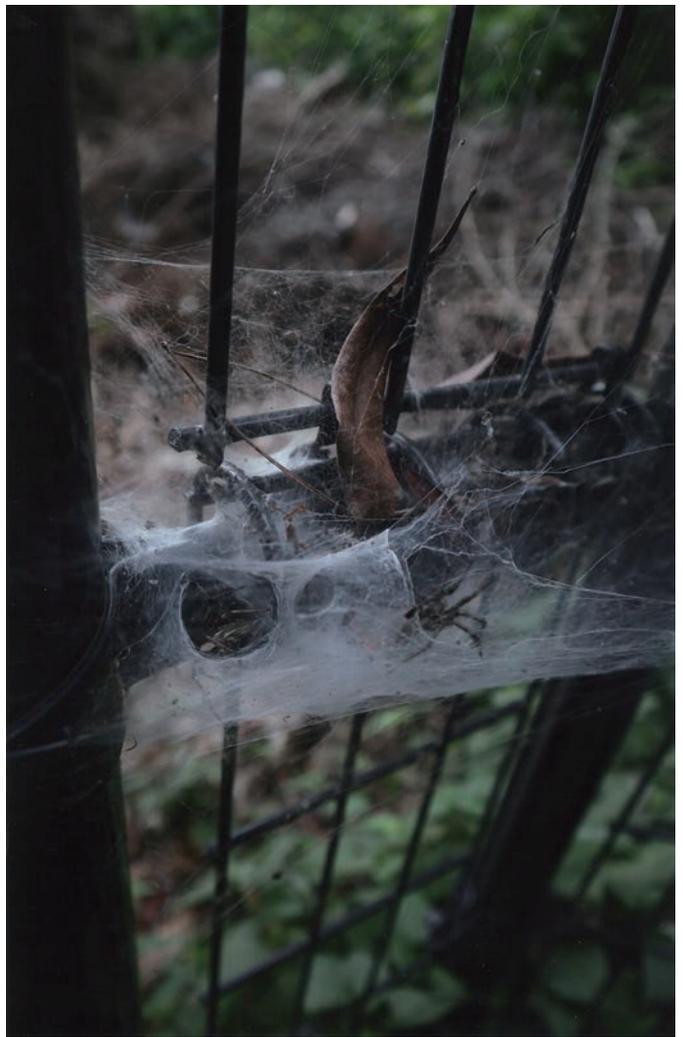
佳作 原田敏朗 (入江ゼミ・デジ研) 「森の仲間たち」



佳作 石川晶 (総合科) 「さあ、帰ろうね~」



佳作 生田一美 (尾辻ゼミ) 「かつて・・・もうすぐ。」



佳作 栗原恭子 (総合科) 「やぎとくもの糸」



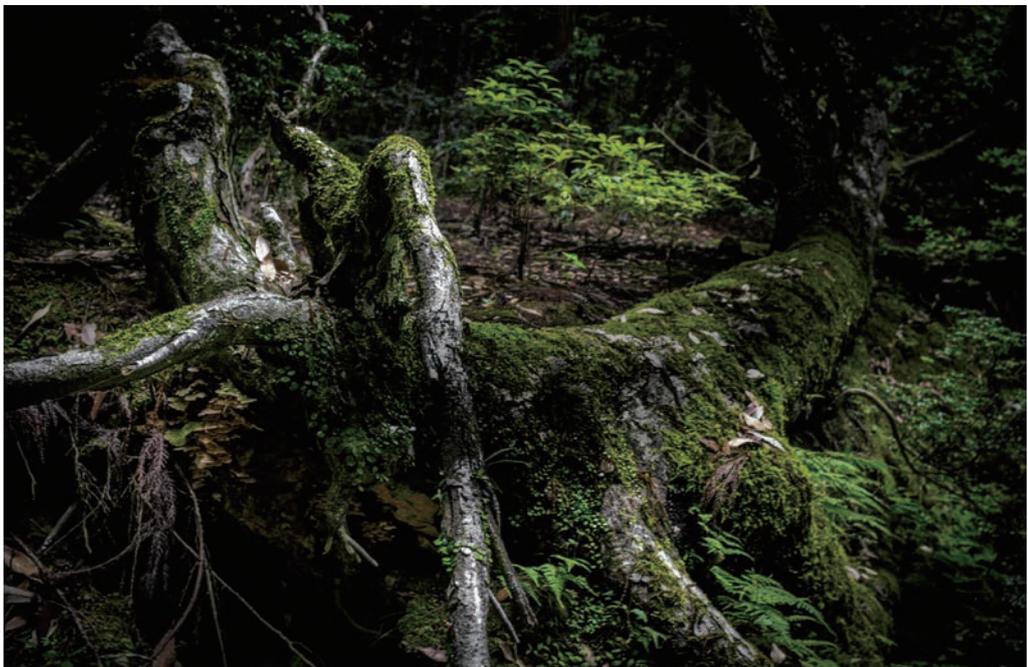
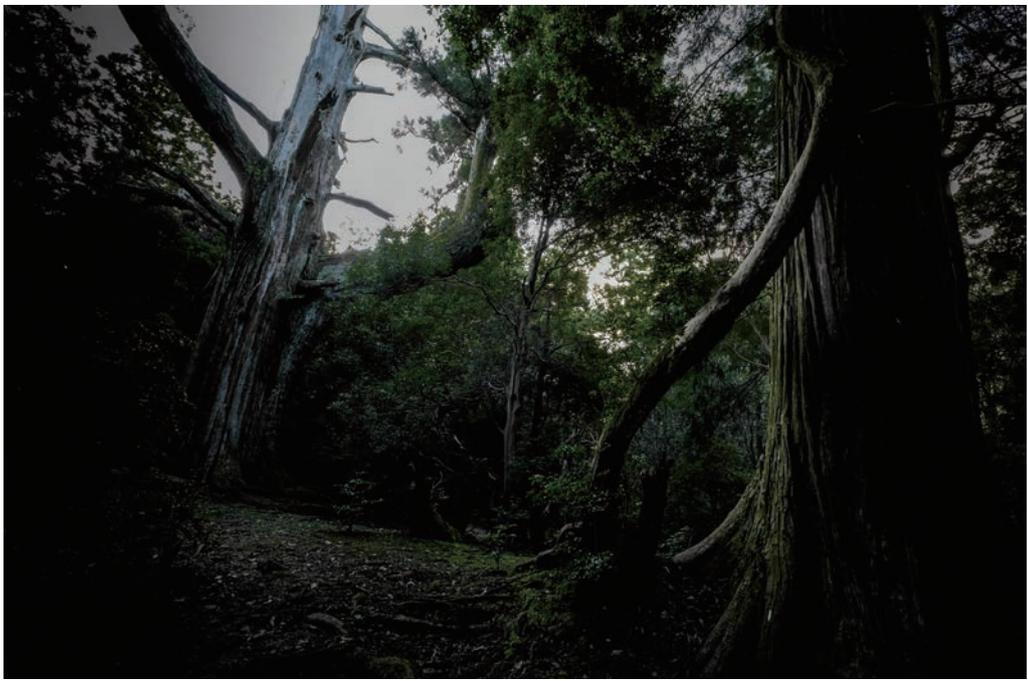
佳作 山田志ん (総合科) 「金床」



佳作 矢野ふじね (総合科) 「まちの樹 (じゅ)」



入選 とみたやすよ (日曜撮影専科) 「**廃業時代**」



入選 榎本佳代（総合科）「悠久の森へ」



夕靄 (ゆうもや)

當摩勇雄 (モノクロ暗室専科)

かつて横川は信越線の碓氷峠を超えて有名な場所知られています。旧横川変電所など鉄道遺産をはじめ秋の紅葉などの撮影スポットがあります。この作品は夕靄の雰囲気銀塩モノクロームで表現しました。まだまだ「修行中」ですが銀塩写真で作品づくりを続けたいと思います。撮影地：群馬県横川にて



第二次世界大戦の末期、軍部が本土決戦の最後の拠点として、極秘裏に、大本営、政府各省等をこの地に移すという計画のもと、多くの朝鮮の人々が強制的に動員させられた。 長野県松代大本営地下壕

島全体が陸軍の毒ガス製造の地として、地図から消されていた島である。毒ガスにより多くの人に被害をもたらした。馬用のガスマスクも作られたが、どれほどの効果があったのか。

広島県竹原市大久野島



第二次世界大戦末期、日本は戦闘機などの燃料（ガソリン）が不足していたため、軍部は、松脂から戦闘機用燃料を作ろうと松脂をとることを国民に推奨した。

長野県上田市下之郷東山山中 戦闘機燃料用松脂採取の跡



戦争の記憶 清水和雄（入江・金井ゼミ）

全国にはまだ多くの戦争遺跡が残っているが、積極的な保存活動で保護されているものは少ない。多くは邪魔者扱いされ取り壊され、あるいは風化によりどんどん消滅していってしまう。大久野島の遺跡も 2018 年の豪雨により大きな被害を受けた。



国道 16 号 館山哲 (土曜ゼミ)



本條武志 (尾辻ゼミ)

作品は古いですが、ポジカラーで撮った時の写真
です、イワギキョウ、遠くに槍ヶ岳が見えます。

(北アルプス) トウヤクリンドウ、立山





秋日より 長谷川啓一（尾辻ゼミ）

米の自給が充足して米価は下落、農家は経営に苦勞する。さる地区では、地域の全田圃が、家畜専用稲地に変わり、風景はがらりと変わった。ホールクroppサイレージのある風景。セイタカアワダチソウは、ご存知、北米原産種。種が戦後の米軍輸入物資に付着して、全国に広まった。荒地に逞しく生きる姿は憎めない。



小さな命ー東京の植物たち 飯倉豊啓（飯塚ゼミ）

小さきもの。小枝、雑草の中に、命あるもののまことの美しさがあると思った。公園や植物園そして小川のせせらぎなどを歩いてみると、華やかな季節の彩りがなくても、何気ない季節の移ろいを感じることもあり、たくさんの草花などのけ健気な生命力に感動し応援したくなる。



ヨコスカ rainy day

宮本壽男
10月17日
日曜撮影専科撮影会





福島県浪江町請戸地区の茗野神社（くさのじんじゃ）。津波で社殿がすべて流出した。本殿跡に建つのは寄贈された祠、請戸地区の元住民が手を合わせていた。撮影 2021 年 3 月 11 日

「3.11」

金井紀光（ゼミ担当）

福島県浪江町請戸地区は、2011年3月11日の地震、その後の津波により、甚大な被害を受けました。127人が亡くなり、27人が行方不明、約350戸の建物が流されました。地区の共同墓地や神社も全壊したまま放置され、荒れ果てています。原発事故の影響で何年にも渡り、避難指示が続き、復興が遅れたためです。事故の闇は続いています。

建物が流失をまぬがれ、整備された請戸小学校はほぼ当時のまま保存され、県内唯一の震災遺構として一般公開されました。津波到達時間で、止まったままの時計はあの日の記憶を人々に深く留めます。



「鎌倉を歩く」

尾辻弥寿雄（総合科・ゼミ担当）

コロナ禍でどこも出かけられなく鎌倉を歩いています。何も変わっていません。風が吹き、海が唸り、鳶が啼き、崖がき、月が輝いています。

2021.10.30





「雨あがる」

金瀬胖（日曜撮影専科ゼミ担当）

雨があがり歩いた。幼いカマキリが松の木を降りてきた。オイと声を掛けたら、ナニとこちらを向いた。それでもう一度オイというと、くるりと頭を回して木の裏に回った。コロナのおかげで人の活動は減りました。木はそんなこと関係なく茂ります。うちのは切りました。 2021・10・29 自宅そば

